

新生児の姿勢制御について (3)

雨森良彦, 赤松 洋, 野田蓮子(日赤医療センター)
平沢弥一郎, 桐生武夫, 相原康二
中村正道, 臼井永男(東京工業大学保健体育教室)
樋口康子, 戸田悦子, 村上美好(日赤幹部看護婦研修所)
前川喜平(東京慈恵会医科大学小児科)

ヒトのあらゆる動作の基本は直立姿勢であり、またそれは他の動物と区別する重要な定義の一つである。この直立姿勢の基礎は出生から直立できるまでに、ほぼ完成されるものという仮説をたてた。ヒトの生涯においてこの時期ほど顕著な姿勢変化はなく、この時期における直立への諸能力を定量的に評価することは意味あることと考える。

そこで、日赤医療センターにおいて、生後48時間以内の正期産児男女と、測定可能な低出生体重児男女を対象に、重心計ピドスコープを用いて仰臥位と腹臥位における重心の移動、および重心点の測定から、新生児の姿勢制御の様相を調べたところ以下の結果を得た。

1) ガラス面上およびマットパット上で仰臥位および腹臥位をとらせたところ、マットパット上の方がガラス面上よりも重心動揺が小さかった。また

いずれも測定時間の経過と共に動きが小さくなった。

2) 重心図波形のAmplitudeとIntervalは外的刺激に対する新生児の反応の様相をとらえるのに有効であることを認めた。

3) 低出生体重児の重心点は、正期産児に比べて頭部寄りに位置していた。

4) 出生後経過時間によって、重心動揺面積が大きくなっていった。

5) 分娩第Ⅰ期および第Ⅱ期持続時間、高年初産など、分娩時の諸条件が新生児の姿勢制御に何らかの影響をおよぼすものと考えられる様相を認めた。